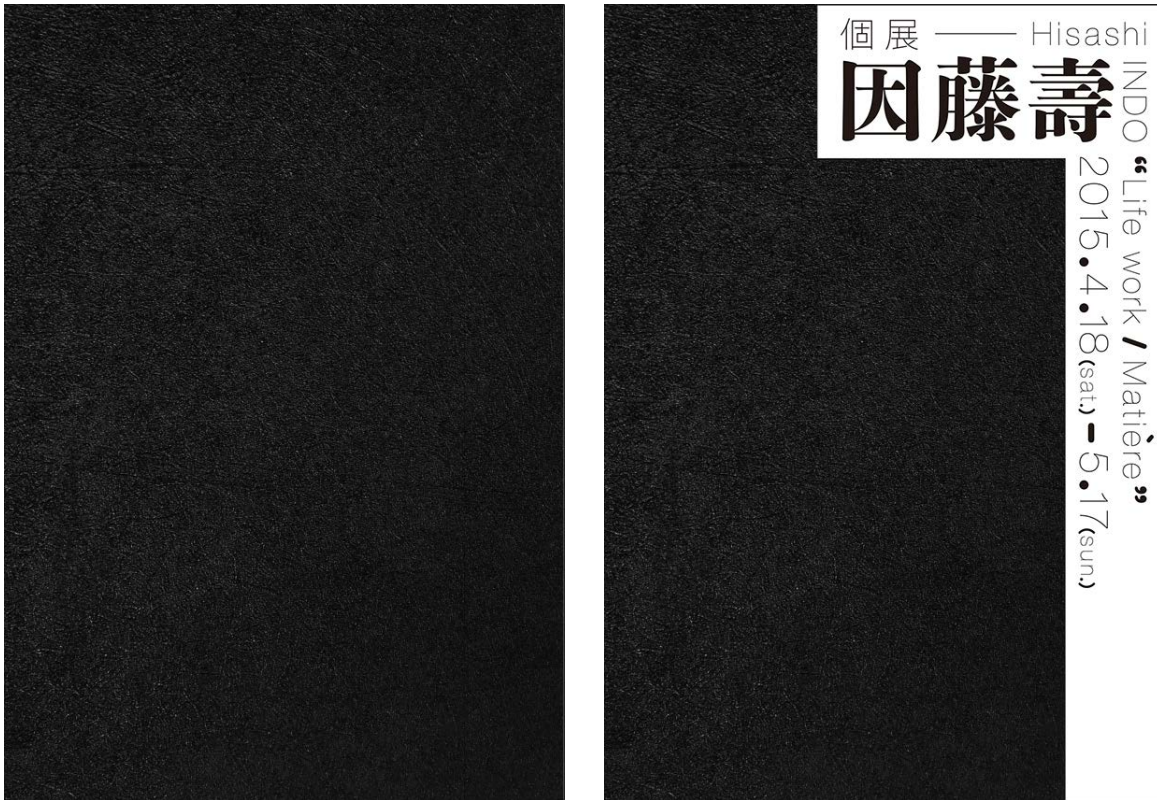


2015年3月30日

因藤壽 個展
「Lifework / Matière」



©Hisashi Indo

展覧会名：因藤壽個展「Lifework / Matière」

会期：2015年4月18日(土)-5月17日(日)

月、火、水曜日休廊

会期中の祝日（4/29、5/4-5/6）は通常営業

時間：12:00-19:00

会場：Fm

東京都渋谷区恵比寿南1-14-12 ルソレイユ3 303

Tel：070-6969-1412

URL: <http://galleryfm.com>

協力：gallery a-cube 資料協力：東京画廊+BTAP

オープニングパーティー：2015.4.18(土) 17:00-19:00

2015年3月30日

Fmは因藤壽（いんどうひさし）個展「Lifework / Matière」を開催致します。

Fmは昨年9月のオープニング展以来、新進気鋭作家と、既に一定の評価を得ているものの、現在において改めて重要な価値を帯びる作家の展覧会を交互に開催してきました。今回は独学で絵画を学び、独自のモノクローム絵画を制作した因藤壽（1925-2009）の60年代に制作された作品を展示します。

また、本展覧会は、現在Fmが入居する建物の建て壊しに伴う移転前の最後の展覧会となります。



©Hisashi Indo

因藤壽は1925年に北海道に生まれ、工業高校電気科を卒業した後に北海道大学の超短波研究所に勤務し、終戦を迎えて復員した後に独学で絵画の制作を始め、画家としての道を歩み始めます。中学校の教員として働く傍ら作品を精力的に制作を続けた因藤は、多くの展覧会に出品を続けました。二科展に入選後は、吉原治良や山口長男が発起人となり、齊藤義重、桂ゆきらが所属した前衛絵画を研究する二科九室会に所属しました。また、無審査で作品を出品することができ、後の前衛美術の動向に大きな影響を与えた読売アンデパンダン展にも出品を続け、アンフォルメル運動を推進するミッシェル・タピエに高い評価を受けました。

作家として独立した後も国内外で多くの展覧会に参加し、2009年に死去するまで、独自の絵画制作を追求し続けました。

学生時代と超短波研究所にて勤務していた時代とを通じて科学に携わり続けてきた因藤ですが、自身の作品について、「人間を、世界を、その存在を見つめるものでなければならず（後略）」と初個展のパンフレットに記しているように、自らが追う人間の存在や世界の奥行きについての認識を深め、表現するために絵画の制作を始めました。

2015年3月30日

因藤の作風は制作を続けるとともに変化していきますが、大きく分けて三つに区分することができます。1940年代後半より、戦後の復興と共に訪れた急激な社会変化に置かれた人間の姿を強い色彩とシュールレアリズム風な構成を用いて描いた「ネオリアリズム」の時代、1956年より始まる、自分自身と人間の存在についての深い考察に基づいて制作されるミニマルペインティングの時代、1970年代に入って始まる、人間の精神世界と情念との考察をさらに深く掘り進めて制作され、祈りにも似たシリーズ作品を制作する、内面的モノクロームの時代です。いずれの時代にも一貫しているのは、人間の内面、ひいては人間そのものについての考察です。戦中から戦後、高度経済成長の時代を経て、絶えることのない経済成長と社会発展の滞りとそれらに対する疑問が露呈する現代を通して、因藤は時代が進化しても変化をしない人間の本質的な部分を見つめ続け、表現してきたと言えます。

今回の展示では、1960年代に制作された因藤のミニマルペインティングの時代に焦点をあて、キャンバスの作品とドローイングの作品を展示します。

絵具を幾層にも塗り重ねることで密度を増した深いモノクロームの色彩と、筆だけでなく、ローラーやペインティングナイフなどを用いて塗り重ねられたことで表面に残る微小でありながら力強い”痕跡”に、制作する行為そのものが生を検証することであった因藤の姿を感じることができます。

■因藤寿 Hisashi INDO (1925-2009)

北海道稚内市生まれ。苫小牧工業学校を卒業後、北海道大学超短波研究所に勤務する傍ら1947年頃より独学で作品の制作を始める。鮮やかな色彩を使った「ネオリアリズム」の時代から、1956年以降はモノクロームによる表現を展開する。二科展九室会に所属し、二科展への出品や読売アンデパンダン展など数多くの展覧会に出品。ミッシェル・タピエに高い評価を受ける。1963年埼玉県大宮に移った後は個展を中心に精力的に制作発表を行なう。2002年北海道立旭川美術館で回顧展「因藤寿展」が開催された。

